

表21 食育の評価にかかわる実績(一般園)

| | 回答内容 | |
|-------------|------|--------|
| | 実数 | % |
| 1 計画・実践への活用 | 4 | 23.5% |
| 2 栄養指導の充実 | 2 | 11.8% |
| 3 調理保育 | 2 | 11.8% |
| 4 園全体での話し合い | 1 | 5.9% |
| 5 保護者の意見聴取 | 1 | 5.9% |
| 6 食への関心向上 | 1 | 5.9% |
| 7 栽培活動 | 1 | 5.9% |
| 8 給食室との交流 | 1 | 5.9% |
| 9 保育者の意識改革 | 1 | 5.9% |
| 10 試食会 | 1 | 5.9% |
| 11 季節変化の考慮 | 1 | 5.9% |
| 12 指先の発達 | 1 | 5.9% |
| 合計 | 17 | 100.0% |

2-7. 今後の食育の計画づくりへの工夫

「7. 今後、食育を充実させるため、保育の計画づくりについて、工夫していきたい取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対し、カテゴリー化できた内容は44項目であった。この44項目に対して、204件の回答が得られた。その結果は表22に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「栽培活動」と「調理保育」の10.8%であった。次に「職員連携」7.4%、「発達・年齢の考慮」6.9%、「指導計画の作成」5.9%が続く。以上の5つの取り組みで全回答数の41.8%を占めるにとどまった。計画づくりの実績同様、今後の計画づくりに対しても、多様な取り組みを期待しているということだろう。ただ、回答内容には計画づくりの実績同様、実践した内容に関するものと、計画書そのものを作成する際に工夫したことの2点が混在している。

こうした点を踏まえ、計画作成の方法や考え方について見てみると、前述した「職員連携」「発達・年齢考慮」「指導計画の作成」に続き、「保育の計画との一体化」と「食育内容の検討」が2.9%、「目標の検討」が1.5%、「子どもの実態把握」と「計画書作成の担当係」が1.0%、そして「記録の活用」と「計画様式の見直し」「食育内容と方法の統一」「チェックリストの作成」「他園との情報交換」が0.5%となっている。このうち、「目標の検討」「指導計画の作成」「食

育内容の検討」「計画様式の見直し」「食育内容と方法の統一」「チェックリストの作成」は、食育プログラムの開始時には見られなかったものである。開始時よりも、計画作成、及び見直しのための具体策が、豊富に想定されていることがわかる。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表23・24のようになる。

これを見ると、モデル園が43項目、一般園が14項目と、モデル園の方が計画づくりにおいても、幅広い取り組みを想定していることがわかる。特に、モデル園からは前述した食育プログラムの開始時には見られなかった「目標の検討」「指導計画の作成」「食育内容の検討」「計画様式の見直し」「食育内容と方法の統一」「チェックリストの作成」の全てについて、必要性を感じる意見が見られた。

表22 今後の食育の計画づくりへの工夫

| | 回答内容 | |
|----------------|------|--------|
| | 実数 | % |
| 1 栽培活動 | 22 | 10.8% |
| 2 調理保育 | 22 | 10.8% |
| 3 職員連携 | 15 | 7.4% |
| 4 発達・年齢考慮 | 14 | 6.9% |
| 5 指導計画の作成 | 12 | 5.9% |
| 6 雰囲気・環境づくり | 9 | 4.4% |
| 7 フンチルーム設置 | 8 | 3.9% |
| 8 遊びの充実 | 8 | 3.9% |
| 9 保護者への啓発・啓蒙 | 6 | 2.9% |
| 10 自主性・意欲の形成 | 6 | 2.9% |
| 11 体を使った活動 | 6 | 2.9% |
| 12 保育の計画との一体化 | 6 | 2.9% |
| 13 給食室との交流 | 6 | 2.9% |
| 14 食育内容の検討 | 6 | 2.9% |
| 15 食事マナー指導 | 5 | 2.5% |
| 16 異年齢交流 | 5 | 2.5% |
| 17 地域交流 | 5 | 2.5% |
| 18 栄養指導・食教育 | 4 | 2.0% |
| 19 食への関心・媒体指導 | 3 | 1.5% |
| 20 目標の検討 | 3 | 1.5% |
| 21 子どもの実態把握 | 2 | 1.0% |
| 22 生活習慣・リズムの形成 | 2 | 1.0% |
| 23 食文化・行事の充実 | 2 | 1.0% |
| 24 偏食指導 | 2 | 1.0% |
| 25 季節変化の考慮 | 2 | 1.0% |
| 26 咀嚼の促し | 2 | 1.0% |
| 27 個別対応の充実 | 2 | 1.0% |
| 28 献立の工夫 | 2 | 1.0% |
| 29 計画書作成の担当係 | 2 | 1.0% |
| 30 食材紹介 | 1 | 0.5% |
| 31 感謝・心の育ちを促す | 1 | 0.5% |
| 32 バイク給食 | 1 | 0.5% |
| 33 記録の活用 | 1 | 0.5% |
| 34 会食・人間関係づくり | 1 | 0.5% |
| 35 計画様式の見直し | 1 | 0.5% |
| 36 手先の発達 | 1 | 0.5% |
| 37 ホームページの充実 | 1 | 0.5% |
| 38 食事形式の見直し | 1 | 0.5% |
| 39 食育内容と方法の統一 | 1 | 0.5% |
| 40 体験重視 | 1 | 0.5% |
| 41 自然とのふれあい | 1 | 0.5% |
| 42 チェックリストの作成 | 1 | 0.5% |
| 43 他園との情報交換 | 1 | 0.5% |
| 44 活動の持続性 | 1 | 0.5% |
| 合計 | 204 | 100.0% |

表23 今後の食育の計画づくりへの工夫(モデル園)

| | | 回答内容 | |
|----|-------------|------|--------|
| | | 実数 | % |
| 1 | 栽培活動 | 20 | 11.5% |
| 2 | 調理保育 | 18 | 10.3% |
| 3 | 発達・年齢考慮 | 10 | 5.7% |
| 4 | 職員連携 | 10 | 5.7% |
| 5 | 指導計画の作成 | 10 | 5.7% |
| 6 | 雰囲気・環境づくり | 9 | 5.2% |
| 7 | 遊びの充実 | 8 | 4.6% |
| 8 | ランチルーム設置 | 7 | 4.0% |
| 9 | 自主性・意欲の形成 | 6 | 3.4% |
| 10 | 保育の計画との一体化 | 6 | 3.4% |
| 11 | 食事マナー指導 | 5 | 2.9% |
| 12 | 保護者への啓発・啓蒙 | 5 | 2.9% |
| 13 | 体を使った活動 | 5 | 2.9% |
| 14 | 異年齢交流 | 5 | 2.9% |
| 15 | 地域交流 | 5 | 2.9% |
| 16 | 給食室との交流 | 4 | 2.3% |
| 17 | 食育内容の検討 | 4 | 2.3% |
| 18 | 食への関心・媒体指導 | 3 | 1.7% |
| 19 | 目標の検討 | 3 | 1.7% |
| 20 | 子どもの実態把握 | 2 | 1.1% |
| 21 | 生活習慣・リズムの形成 | 2 | 1.1% |
| 22 | 栄養指導・食教育 | 2 | 1.1% |
| 23 | 食文化・行事の充実 | 2 | 1.1% |
| 24 | 偏食指導 | 2 | 1.1% |
| 25 | 咀嚼の促し | 2 | 1.1% |
| 26 | 献立の工夫 | 2 | 1.1% |
| 27 | 食材紹介 | 1 | 0.6% |
| 28 | 感謝・心の育ちを促す | 1 | 0.6% |
| 29 | バイキング給食 | 1 | 0.6% |
| 30 | 記録の活用 | 1 | 0.6% |
| 31 | 会食・人間関係づくり | 1 | 0.6% |
| 32 | 計画様式の見直し | 1 | 0.6% |
| 33 | 手先の発達 | 1 | 0.6% |
| 34 | ホームページの充実 | 1 | 0.6% |
| 35 | 食事形式の見直し | 1 | 0.6% |
| 36 | 食育内容と方法の統一 | 1 | 0.6% |
| 37 | 体験重視 | 1 | 0.6% |
| 38 | 個別対応の充実 | 1 | 0.6% |
| 39 | 自然とのふれあい | 1 | 0.6% |
| 40 | 計画書作成の担当係 | 1 | 0.6% |
| 41 | チェックリストの作成 | 1 | 0.6% |
| 42 | 他園との情報交換 | 1 | 0.6% |
| 43 | 活動の持続性 | 1 | 0.6% |
| | 合計 | 174 | 100.0% |

表24 今後の食育の計画づくりへの工夫(一般園)

| | | 回答内容 | |
|----|------------|------|--------|
| | | 実数 | % |
| 1 | 職員連携 | 5 | 16.7% |
| 2 | 発達・年齢考慮 | 4 | 13.3% |
| 3 | 調理保育 | 4 | 13.3% |
| 4 | 栽培活動 | 2 | 6.7% |
| 5 | 指導計画の作成 | 2 | 6.7% |
| 6 | 栄養指導・食教育 | 2 | 6.7% |
| 7 | 給食室との交流 | 2 | 6.7% |
| 8 | 季節変化の考慮 | 2 | 6.7% |
| 9 | 食育内容の検討 | 2 | 6.7% |
| 10 | 保護者への啓発・啓蒙 | 1 | 3.3% |
| 11 | ランチルーム設置 | 1 | 3.3% |
| 12 | 体を使った活動 | 1 | 3.3% |
| 13 | 個別対応の充実 | 1 | 3.3% |
| 14 | 計画書作成の担当係 | 1 | 3.3% |
| | 合計 | 30 | 100.0% |

2-8. 今後の食育の評価への工夫

「8. 今後、食育を充実させるため、保育の評価として、工夫していきたい取り組みには、どのようなものがありますか？」という問いに対して、カテゴリー化できた内容は43項目であった。この43項目に対して、131件の回答が得られた。その結果は、表25に示す通りである。

そのうち、最も回答数が多かったのは、「保護者との連携」の11.5%であった。次に「調理保育」と「計画との連動」が6.9%、「園全体での話し合い」が5.3%、「栽培指導」と「栄養指導の充実」「職員の意志統一」の4.6%が続く。以上の5つの取り組みで全回答数の44.4%を占めるにとどまった。評価活動の実績同様、今後の評価活動に対しても、多様な取り組みを期待しているということだろう。ただ、回答内容には評価活動の実績同様、子どもの育ちとして期待したい事柄、つまり目標に関することと実践内容、そして評価方法の3点が混在している。

こうした点を踏まえ、評価方法について見てみると、前述した「計画との連動」「園全体での話し合い」「職員の意志統一」に続き、「文字記録の充実」と「目標の確認」が3.1%、「個別評価の重視」と「園内プロジェクトチームでの検討」「クラスの反省」「活動の見直し」が1.5%、「チェックリストの活用」と「ビデオ活

用「ケース研究」が0.8%となっている。このうち、「計画との連動」「職員の意志統一」「園内プロジェクトチームでの検討」「クラスの反省」「活動の見直し」は、食育プログラムの開始時には見られなかったものである。開始時よりも、食育プログラムの実施を経て、具体的な評価活動の方法が想定されていることがわかる。

次に、食育プログラム実施後の結果をモデル園と一般園に分けると、表26・27のようになる。

これを見ると、モデル園が42項目、一般園が10項目と、モデル園の方が評価活動においても、幅広い取り組みを想定していることがわかる。特に、モデル園では前述した食育プログラムの開始時には見られなかった「計画との連動」「職員の意志統一」「園内プロジェクトチームでの検討」「クラスの反省」「活動の見直し」の全てについて必要性を感じる意見が見られた。

表26 今後の食育の評価への工夫(モデル園)

| | 回答内容 | |
|--------------------|------|--------|
| | 実数 | % |
| 1 保護者との連携 | 13 | 11.3% |
| 2 園全体での話し合い | 6 | 5.2% |
| 3 栽培活動 | 6 | 5.2% |
| 4 計画との連動 | 6 | 5.2% |
| 5 栄養指導の充実 | 5 | 4.3% |
| 6 職員の意志統一 | 5 | 4.3% |
| 7 調理保育 | 5 | 4.3% |
| 8 文字記録の充実 | 4 | 3.5% |
| 9 食への関心向上 | 4 | 3.5% |
| 10 目標の確認 | 4 | 3.5% |
| 11 ランチルームの充実 | 4 | 3.5% |
| 12 生活リズムの定着 | 4 | 3.5% |
| 13 発達・年齢考慮 | 3 | 2.6% |
| 14 遊びの充実 | 3 | 2.6% |
| 15 人間関係づくり | 3 | 2.6% |
| 16 他園見学 | 3 | 2.6% |
| 17 地域との連携 | 3 | 2.6% |
| 18 食材紹介 | 3 | 2.6% |
| 19 個別評価の重視 | 2 | 1.7% |
| 20 給食室との交流 | 2 | 1.7% |
| 21 継続性の重視 | 2 | 1.7% |
| 22 園内プロジェクトチームでの検討 | 2 | 1.7% |
| 23 活動の見直し | 2 | 1.7% |
| 24 指先の発達 | 2 | 1.7% |
| 25 食事のマナー指導 | 2 | 1.7% |
| 26 自主性・意欲の形成 | 1 | 0.9% |
| 27 チェックリストの活用 | 1 | 0.9% |
| 28 ビデオ活用 | 1 | 0.9% |
| 29 食環境の見直し | 1 | 0.9% |
| 30 講演・講習会 | 1 | 0.9% |
| 31 ケース研究 | 1 | 0.9% |
| 32 保育者の意識改革 | 1 | 0.9% |
| 33 食習慣の形成 | 1 | 0.9% |
| 34 心の育ち | 1 | 0.9% |
| 35 試食会 | 1 | 0.9% |
| 36 クラスの反省 | 1 | 0.9% |
| 37 献立の工夫 | 1 | 0.9% |
| 38 偏食指導 | 1 | 0.9% |
| 39 食事時間 | 1 | 0.9% |
| 40 体を使った遊び | 1 | 0.9% |
| 41 自然とのふれあい | 1 | 0.9% |
| 42 補食 | 1 | 0.9% |
| 合計 | 115 | 100.0% |

表25 今後の食育の評価への工夫

| | 回答内容 | |
|--------------------|------|--------|
| | 実数 | % |
| 1 保護者との連携 | 15 | 11.5% |
| 2 調理保育 | 9 | 6.9% |
| 3 計画との連動 | 9 | 6.9% |
| 4 園全体での話し合い | 7 | 5.3% |
| 5 栽培活動 | 6 | 4.6% |
| 6 栄養指導の充実 | 6 | 4.6% |
| 7 職員の意志統一 | 6 | 4.6% |
| 8 文字記録の充実 | 4 | 3.1% |
| 9 食への関心向上 | 4 | 3.1% |
| 10 目標の確認 | 4 | 3.1% |
| 11 ランチルームの充実 | 4 | 3.1% |
| 12 生活リズムの定着 | 4 | 3.1% |
| 13 地域との連携 | 4 | 3.1% |
| 14 食材紹介 | 4 | 3.1% |
| 15 発達・年齢考慮 | 3 | 2.3% |
| 16 遊びの充実 | 3 | 2.3% |
| 17 人間関係づくり | 3 | 2.3% |
| 18 他園見学 | 3 | 2.3% |
| 19 個別評価の重視 | 2 | 1.5% |
| 20 給食室との交流 | 2 | 1.5% |
| 21 継続性の重視 | 2 | 1.5% |
| 22 園内プロジェクトチームでの検討 | 2 | 1.5% |
| 23 クラスの反省 | 2 | 1.5% |
| 24 活動の見直し | 2 | 1.5% |
| 25 指先の発達 | 2 | 1.5% |
| 26 食事のマナー指導 | 2 | 1.5% |
| 27 自主性・意欲の形成 | 1 | 0.8% |
| 28 チェックリストの活用 | 1 | 0.8% |
| 29 ビデオ活用 | 1 | 0.8% |
| 30 食環境の見直し | 1 | 0.8% |
| 31 講演・講習会 | 1 | 0.8% |
| 32 ケース研究 | 1 | 0.8% |
| 33 保育者の意識改革 | 1 | 0.8% |
| 34 食習慣の形成 | 1 | 0.8% |
| 35 心の育ち | 1 | 0.8% |
| 36 試食会 | 1 | 0.8% |
| 37 献立の工夫 | 1 | 0.8% |
| 38 偏食指導 | 1 | 0.8% |
| 39 食事時間 | 1 | 0.8% |
| 40 食事の準備へのかかわり | 1 | 0.8% |
| 41 体を使った遊び | 1 | 0.8% |
| 42 自然とのふれあい | 1 | 0.8% |
| 43 補食 | 1 | 0.8% |
| 合計 | 131 | 100.0% |

表27 今後の食育の評価への工夫(一般園)

| | | 回答内容 | |
|----|-------------|------|--------|
| | | 実数 | % |
| 1 | 調理保育 | 4 | 25.0% |
| 2 | 計画との連動 | 3 | 18.8% |
| 3 | 保護者との連携 | 2 | 12.5% |
| 4 | 園全体での話し合い | 1 | 6.3% |
| 5 | 栄養指導の充実 | 1 | 6.3% |
| 6 | 職員の意志統一 | 1 | 6.3% |
| 7 | クラスの反省 | 1 | 6.3% |
| 8 | 地域との連携 | 1 | 6.3% |
| 9 | 食事の準備へのかかわり | 1 | 6.3% |
| 10 | 食材紹介 | 1 | 6.3% |
| | 合計 | 16 | 100.0% |

D. 結論

以上、食育プログラムの開発とその評価方法の検討を進める4つのモデル園を含めた計6園の保育所職員を対象に、食育プログラム実施後の食育に関する認識の実態を把握した。

その結果、食育実践に関する期待度については、食育プログラム開始時と比較すると、職員連携、及び保育との連動性のいずれにおいても、「かなりできそう」と自信を深める職員が増加していることがわかった。

ただ、「かなりできそう」と「少しできそう」を合算すると、食育プログラム実施後は、保育との連動性に関する期待感が高まっているのに対し、職員連携への期待感はやや減少していた。

保育との連動性に関する期待感が高まった背景には、食育プログラムを実施する中、食育の計画を様々なかたちで作成したことがある。計画書として目に見えるかたちにまとめあげていくことは、職員の自信となり、意欲の高まりにもつながる。新たな実践に挑戦し、かつ改善していくためには、個々の職員の意欲、意識の高まりが不可欠である。食育プログラムを開発し、その目標・内容・方法を計画書としてとりまとめていく作業は、食育実践の積み重ね、あるいは整理を促すだけでなく、こうした個々の職員の意欲も引き出す結果となった。

一方、職員連携への期待感はやや減少している背景には、食育の実施を通して異なる職種が話し合い、共通理解を深めることの困難さを実感したことがある。いずれの職場でも、人間関

係の構築は永遠のテーマであるが、物事を進めれば進めるほど、その困難さを実感させられることは多い。食育プログラム実施後の結果は、そうした傾向の一端を示したものと理解できる。今後は、職員連携をスローガンとして掲げるだけにとどめず、前述した計画書作成という目に見えるかたちにする作業を通して、職種を超えた連携を図る必要がある。

次に、食育プログラム実施後におけるモデル園と一般園の相違だが、食育実践に関する期待度については、食育計画作成上の職員連携を除いてモデル園の方が、期待度を高めていることがわかった。モデル園として、園全体で自覚的に取り組み、その成果を基本的な計画である保育計画や、具体的な計画である指導計画に関連させながら食育の計画書としてまとめてきたこと。また、モデル園が子どもの成長を評価票に記載する取り組みを実施してきた結果であろう。

さらに、食育実践の実績と今後の工夫についても、モデル園の方が内容を幅広く捉え、取り組もうとしていることがわかった。食育実践に関する期待度とも合わせて、モデル園ならではの高まりを見せたわけである。子ども以前に保育者自身が変わらなければ、食育実践の質も向上しない。モデル園に見られる保育所職員の食育に対する認識の高まりが、他の園にも拡大し、よりよい食育実践が広がることを期待したい。

ただ、食育実践に関する期待度、食育実践の実績と今後の工夫のいずれにおいても、評価活動への理解度、実績の度合いが低いこともわかった。この傾向は、食育プログラムの開始時から変化はない。

保育の世界は評価への意識、また、評価の方法に対する蓄積が弱い。まして、新たに課題となった食育について、何をどのように評価することが適切なのか、食育プログラムを実施すればするほど、悩みも増したのであろう。今回の調査結果は、そうした園及び職員の課題も明らかにしたと考える。

このように、評価等に対する認識が定着、共有しきれていないとすれば、設問内容もより丁寧、かつ具体的なものに修正する必要もあった。今回の調査は、食育プログラムの開始時と比較するため、実施後の設問もあえて大きな変更はしなかった。今後の課題としたい。

E. 研究発表

1. 学会発表

師岡章・酒井治子・廣瀬志保・金田利子：保育所における食育のあり方を考える, 第17回日本乳幼児教育学会(東京学芸大学), 2007

師岡章・酒井治子：保育所における食育プログラムの開発と評価—第1報 モデル園での食育プログラムの内容構成の特徴と課題, 第54回日本栄養改善学会学術総会(長崎新聞文化ホール), 2007

清水祥子・廣瀬志保・師岡章・酒井治子：保育所における食育プログラムの開発と評価—第2報 そのプロセスと雑誌連載やホームページによる効果, 第54回日本栄養改善学会学術総会(長崎新聞文化ホール), 2007

廣瀬志保・師岡章・酒井治子：保育所における食育プログラムの開発と評価—第3報 保護者の食意識・食態度と子どもの食事講堂の変化, 第54回日本栄養改善学会学術総会(長崎新聞文化ホール), 2007

酒井治子・師岡章・堤ちはる・清野富久江：保育所における食育の計画づくりに関する全国的な動向, 第54回日本栄養改善学会学術総会(長崎新聞文化ホール), 2007

酒井治子・師岡章・針谷順子：自由集会IV 乳幼児期の食育 栄養教諭・栄養士の役割を考える～保育所保育指針・幼稚園教育要領の改訂の中で～, 第54回日本栄養改善学会学術総会(長崎新聞文化ホール), 2007

2. 雑誌寄稿

師岡章：新学期こそ見直したい 食事マナー・しつけ 指導の心がけ, 少年写真新聞 たのしくたべようニュース, 271(少年写真新聞社), 2007

師岡章：レッツ食育, マザーブック あそぼ, 44-1～12(フレーベル館), 2007-2008

師岡章：2歳児の食育, キンダーブック じゅにあ, 4-1～12(フレーベル館), 2007-2008

師岡章：3歳児の食育, キンダーブック 1, 21-1～12(フレーベル館), 2007-2008

師岡章：4歳児の食育, キンダーブック 2, 44-1～12(フレーベル館), 2007-2008

師岡章：5歳児の食育, キンダーブック 3, 62-1～12(フレーベル館), 2007-2008

師岡章：幼児の食育の考え方・組み立て方, 食
【資料1】

「保育所における食育実践に関する調査」にご協力をお願い

初夏の候、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、このたび、私どもは、「平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）」の交付を受け、「乳幼児の発育・発達段階に応じた食育プログラムの開発と評価に関する研究（主任研究者：酒井治子）」を今年度から進めております。

本研究プロジェクトは、平成 16 年 3 月厚生労働省保育課から通知されました「保育所における食育に関する指針」を基に、保育所における食育を推進するために必要なカリキュラムの編成方法、及び内容、評価方法などのあり方を検討することを目的としています。

今年度のはじめと同様の調査をさせていただきましたが、今の時点での保育者の変化も結果を示していきたいと思っております。お忙しいところ恐縮ですが、調査の趣旨をご理解いただき、保育所の全職員を対象に、ご協力いただきますようお願い致します。

調査の内容につきましては、私どもが責任をもちますが、不審な点や分からない点がございましたら、下記までお問い合わせ下さい。回答の済んだ調査票は、園で回収し、東京家政学院大学 酒井宛に送って着払いでお送りください。

以上、よろしくお願い致します。

平成 19 年 2 月 8 日

問い合わせ先

白梅学園短期大学保育科 師岡研究室

〒187-8570 東京都小平市小川町 1-830

TEL 042-346-5623, FAX 042-346-5644

e-mail: morooka@shiraume.ac.jp

東京家政学院大学 酒井 治子

〒194-0292 東京都町田市相原町 2600

Tel/Fax (042)782-3404 (直通)

e-mail: hsakai@kasei-gakuin.ac.jp

下記の事項についてご記入下さい。

職員番号 ()

I. 施設名

(立 保育所)

II. 職種名

()

III. 経験年数

(年目) (保育士のみ 担当クラス 歳児)

IV. 食育の計画に関する以下の項目について、現時点でどのようにお考えですか？各項目

について、1～5に○をつけてください。

- かなりできそうだ
少しできそうだ
どちらともいえない
あまりできそうにない
全くできそうにない
- (1) 食育の計画をする上で、保育士、調理員、栄養士、
看護師等の職員と、連携がとれそうだ
- (2) 食育の実践をする上で、保育士、調理員、栄養士、
看護師等の職員と、連携がとれそうだ
- (3) 食育の評価・見直しをする上で、保育士、調理員、
栄養士、看護師等の職員と、連携がとれそうだ
- (4) 保育計画に連動した「食育の計画」づくりをすす
めることができそうだ
- (5) 指導計画に連動した「食育の計画」づくりをすす
めることができそうだ
- (6) 保育の評価に連動した「食育の評価」づくりをすす
めることができそうだ

IV. 下記の事項について、現時点でのあなたのお考えをご記入下さい。

1. 保育所で実施すべき食育として、どのような取り組みを思い浮かべますか？

[]

2. 今年度、食事時間中の指導・援助として、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？

[]

3. 今年度、食事の雰囲気づくりに関して、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？

[]

4. 今年度、食事時間以外で、子どもの食を充実させるために重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？

[]

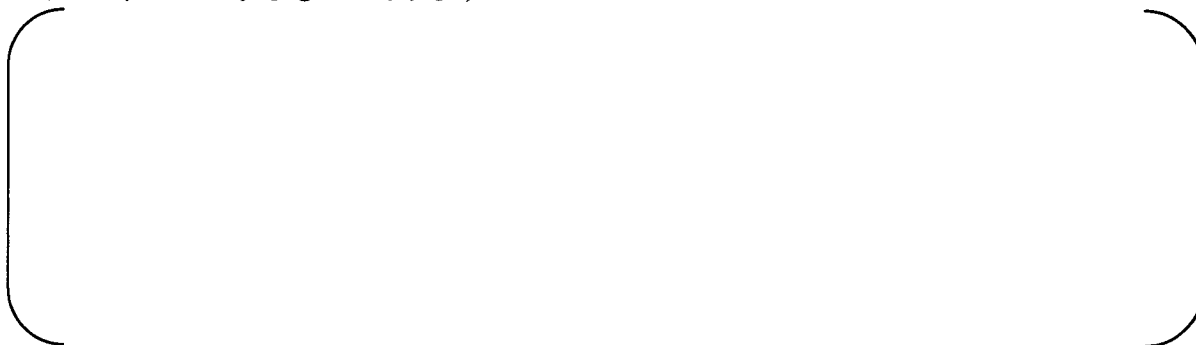
5. 今年度、食育を充実させるため、保育の計画づくりについて、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？



6. 今年度、食育を充実させるため、保育の評価として、重視してきた取り組みには、どのようなものがありますか？



7. 今後、食育を充実させるため、保育の計画づくりについて、工夫していきたい取り組みには、どのようなものがありますか？



8. 今後、食育を充実させるため、保育の評価として、工夫していきたい取り組みには、どのようなものがありますか？



ありがとうございました。

3. 児童票に見る食育目標の達成度

分担研究者 師岡 章 白梅学園短期大学 教授

研究要旨：

4つのモデル園に導入した児童票を手がかりに、子どもの成長・発達の度合いを把握し、食育目標の達成度を考察した。

その結果、モデル園では、概ね食育のねらいは達成できていた。ただ、園別に見ると、モデル園の間にも達成率に差が見られ、子どもの評価に対する判断基準が、園あるいは保育者によって異なっていることもわかった。今後は、主観性を大切にしながら、そのバラつきを無くすため、園あるいは保育者の視点を間主観性のレベルまで引き上げることが課題となる。

A. 研究目的

開発される食育プログラムの妥当性は、計画書に記述された内容の整合性だけで担保されるものではない。食育プログラムを実施後、乳幼児の姿を評価し、健全な成長・発達が図られたか否かの検証も不可欠である。

そこで本分担研究は、子どもの成長・発達を把握する方法として平成18年度末から平成19年度にかけて食育プログラムの開発を進める4つのモデル園に導入した児童票を手がかりに、子どもの成長・発達の度合いを把握し、食育目標の達成度を考察することを目的とする。

この作業は、児童票の記載を通して実施した食育実践の評価方法を検証することにもつながることだろう。平成18年度内に調査した保育所職員の食育に関する意識調査では、評価に関する認識の混乱も見られた。こうした結果は、食育のみならず、保育所保育全般にわたり、評価という営みが十分に確立・共有されていない実態も明らかにした。しかし、保育者の保育活動は、計画－実践－評価という営みを連動、かつ循環させる中ではじめて充実・改善が図られるものである。この原則は食育を実施する上でも変わりはない。本研究自体が食育プログラムの開発とともに、その評価方法の解明を目的としており、本分担研究はその一翼を担うものとなる。

B. 研究方法

1. 対象及び実施方法

本研究において、食育プログラムの開発とその評価方法の検討を依頼する4つのモデル園に対し、全園児数の児童票（食育指導に関する記録）を配布し、必要事項を記入してもらい、郵送にて回収した。

実施については、平成18年度末に1度試行した後、モデル園として取り組みの最終年度を迎える平成19年度に、入園・進級当初の姿と年度修了間近の姿をそれぞれ記入してもらった。

なお、対象となった園児数は、平成18年度が479人（相模原市立上矢部保育園128人、相模原市立文京保育園134人、川崎市立上作延保育園120人、川崎市立戸手保育園97人）、平成19年度が525人（相模原市立上矢部保育園140人、相模原市立文京保育園138人、川崎市立上作延保育園125人、川崎市立戸手保育園122人）であった。

2. 児童票の内容と記載方法

在園する子ども一人ひとりを対象に、その成長・発達の度合いを記録する用紙として児童票（食育指導の記録）を作成した。作成にあたっては、幼稚園にて記載が義務づけられている児童等の学習の状況を記録した書類である『幼稚園幼児指導要録』のうち、「指導に関する記録」として文部科学省が示している一般的な様式例

児童票（食育指導に関する記録）

園名 _____ 性別： 男 ・ 女 _____ ID _____ 平成18年度 _____ 平成19年度 _____

| 園名 | ねらい（食育の観点から発達を捉える視点）※1 | 発達の状況 | | 指導の観点等※2 | 平成18年度 (クラスの観点) | 平成19年度 (クラスの観点) |
|--------------|--|-------|------|--------------|--------------------|--------------------|
| | | 18年度 | 19年度 | | | |
| 6か月未満児 | ①よく遊び、よく眠る。 ②お腹がすいたら、泣く。 ③保育士にゆったり抱かれて、乳（母乳・ミルク）を飲む。 ④授乳してくれる人に関心を持つ。 | | | | | |
| 6か月～1歳3か月未満児 | ①よく遊び、よく眠り、満足するまで乳を吸う。 ②お腹がすいたら、泣く、または、喃語によって、乳や食べものを催促する。 ③いろいろな食べものに関心を持ち、自分で進んで食べものを持って食べようとする。 ④ゆったりとした雰囲気の中で、食べさせてくれる人に関心を持つ。 | | | | | |
| 1歳3か月～2歳未満児 | ①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ。 ②いろいろな食べものに関心を持ち、手づかみ、または、スプーン、フォークなどを使って自分から意欲的に食べようとする。 ③食卓の前後や汚れたときは、顔や手を拭き、きれいになった快さを感じる。 ④楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人に関心を持つ。 | | | | | |
| 2歳児 | ①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ。 ②食べものに関心を持ち、自分で進んでスプーン、フォーク、箸などを使って食べようとする。 ③いろいろな食べものを進んで食べる。 ④保育士の手助けによって、うがい、手洗いなど、身の回りを清潔にし、食生活に必要な活動を自分でする。 ⑤身近な動植物をはじめ、自然現象をよく見たり、触れたりする。 ⑥保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進めることの喜びを味わう。 ⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、調理をする人に関心を持つ。 ⑧食生活に必要な基本的な習慣や態度に関心を持つ。 ⑨保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進め、一緒に食べる楽しさを味わう。 | | | | | |
| | | | | 指導上参考となる事項※3 | | |
| | | | | 備考 | | |

食育に関する記録は1年間の指導の過程とその結果を要約し、次年度の適切な指導に活かすための資料としての性格をもつものである。
 ※1 食育指針のねらい及び内容を視点として、1年間の指導の過程を振り返り、その児童の発達の実情から向上が著しいと思われるものを「○印」を記入する。
 ※2 園での食育の計画に基づき発達過程区分ごとの指導の重点及び1年間の指導の過程において特に重視してきた点を記入する。
 ※3 園生活を通して全体的、総合的に捉えた児童の発達の姿について記入するとともに、次の年度の指導に必要と考えられる配慮事項等について記入する。
 児童の健康の状況等指導上特に留意する必要がある場合等について記入する。

児童票（食育指導に関する記録）

園名

ID

性別： 男 ・ 女

| 3歳以上児 | 食と健康 | ねらい（食育の観点から発達を促せる視点）※1 | 発達の状況 | | 平成18年度 | 平成19年度 |
|-------|----------|--|-------|------|--------------|----------|
| | | | 18年度 | 19年度 | (クラスの重点) | (クラスの重点) |
| | | ① できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう。 ② 自分の体に必要な食品の種類や働きに気づき、栄養バランスを考慮した食事をとろうとする。 ③ 健康、安全など食生活に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 ④ 自分で食事ができること、身近な人と一緒に食べる楽しさを味わう。 ⑤ 様々な人々との会食を通して、愛情や信頼感を持つ。 ⑥ 食事に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 | | | | |
| | 食と人間関係 | ① いろいろな料理に出会い、発見を楽しんだり、考えたりし、様々な文化に気づく。 ② 地域で培われた食文化を体験し、郷土への関心を持つ。 ③ 食習慣、マナーを身につける。 | | | | (個人の重点) |
| | 食と文化 | ① 自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう。 ② 寝起、朝食、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にすることを心を持つ。 ③ 身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係を考え、食材に対する感覚を豊かにする。 | | | | |
| | いのちの育ちと食 | ① 身近な食材を使って、調理を楽しむ。 ② 食器の準備から後片付けまでの食事づくりに自らがかかわり、味や盛りつけなどを考えたり、それを生活に取り入れようとする。 ③ 食事にふさわしい環境を考えて、ゆとりある落ち着いた雰囲気での食事をとする。 | | | | |
| | 料理と食 | | | | | |
| | | | | | 指導の重点等※2 | |
| | | | | | 指導上参考となる事項※3 | |
| | | | | | | 備考 |

食育に関する記録は1年間の指導の過程とその結果を要約し、次年度の適切な指導に資するための資料としての性格をもつものである。
 ※1 食育指針のねらい及び内容と見做し、1年間の指導の過程を振り返り、その児童の発達の状況から向上が著しいと思われるものを「○印」を記入する。
 ※2 園での食育の計画に基づき、発達過程区分ごとの指導の重点及び1年間の指導の過程において当該児童の指導について特に留意すべき点を記入する。
 ※3 園生活を通して全体的、総合的に捉えた児童の発達の姿について記入するとともに、次の年度の指導に必要な配慮事項等について記入する。

を参考とした。

なお、「ねらい」として子ども一人ひとりの成長・発達を食育の側面から捉える視点については、『幼稚園幼児指導要録』が『幼稚園教育要領』に示された5領域の「ねらい」をそのまま提示していることを参考にし、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』に示されている発達過程区分ごとの「ねらい」や「内容」を掲げることとした。具体的には、3歳以上児については、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』が「食と健康」「食と人間関係」「食と文化」「いのちの育ちと食」「料理と食」の5項目に区分していることを踏襲し、5項目ごとの3つの「ねらい」をそのまま列挙した。ただ、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』に示された2歳未満児の「ねらい」は、やや包括的な文言であるため、具体的な子どもの姿を示している「内容」の方を採用した。また、2歳児については、「ねらい」と「内容」の双方に具体的な視点となる文言があり、それら全てを網羅することとした。以上の内容を、表1・2に示すように、3歳未満児用と3歳以上児用をそれぞれ別途作成し、モデル園に記載を依頼した。

モデル園に記載を依頼する際には、担任保育者としての判断をもとに記入してもらうことを前提に、以下の6点を留意事項として伝えた。

- (1)「ねらい」の欄については、指導・援助の過程を振り返り、他の子どもとの比較はせず、当該園児の発達の実情に即して向上が著しいと思われるものに「○印」のみを記入する。「◎印」「△印」「×印」等の他の記号は使用しない。
- (2)「ねらい」の欄について、当該園児の年齢が2つの発達区分にまたがる場合は、双方に「○印」を記入する。3歳以上児については、「ねらい」に示された内容に関して、その年齢なりに発達の向上が著しいと思われる項目に「○印」を記入する。
- (3)「クラスの重点」の欄については、食育の計画に基づき、クラスの指導・援助として重視してきた点を文章で記入する。
- (4)「個人の重点」の欄については、指導・援助の過程において当該園児の指導について特に重視してきた点を文章で記入する。
- (5)「指導上参考となる事項」の欄については、

当該園児の発達のうち、次年度の指導・援助に必要と考えられる配慮事項等を文書で記入する。

- (6)「備考」の欄については、当該園児の保護者、あるいは家庭の状況について特記すべき事項を文章で記入する。

3. 分析方法

児童票のうち、指導・援助の過程を振り返り、その子どもの発達の実情から向上が著しいと思われるものに「○印」を記入する「ねらい」欄に注目する。記入された「○印」はねらい別、また個人別にカウントし、単純集計する。その結果を通して、食育プログラムの実施を経て、子どもの成長・発達がどの程度図られたかを把握する。

特に、モデル園としての取り組みの最終年度である平成19年度の年度当初と年度末間近の姿を比較し、モデル園における食育プログラムの開発と実践の進展状況について考察する。

なお、比較に当たっては、3歳未満児と3歳以上児の相違に配慮する。理由は、3歳未満児が年度途中にねらいの基準となる発達過程区分を超えて成長するためである。そのため、3歳未満児は一年間、同一クラス、同一担任で保育されるとは限らない。個人差も大きい時期だけに、食育実践をクラス単位で捉え、年度を超えて比較することはなじまない。よって、平成19年度の年度当初と年度末間近を比較し、モデル園における食育プログラムの開発と実践の進展状況を考察する際は、3歳未満児の結果も示すが、主に3歳以上児を対象とする。

(倫理面への配慮)

本調査の実施に際しては、研究者と保育行政担当者との協議の上、施設長に対し書面にて研究の主旨、方法、施設情報の保護を説明した。また児童票の氏名については無記名とし、IDを割り振ることにより個々の園児の識別を図ることとした。記載内容についても施設内外にもれることがないように、プライバシーの確保に最大限の配慮を行った。

C. 研究結果と考察

1. 食育目標の達成度

1-1. 園単位でのねらいの達成度

平成19年度の年度末間近における園単位での食育目標の達成度のうち、3歳未満児の結果

を表3に、3歳以上児の結果を表4に示す。なお、年度末間近の時点では全てのモデル園で6ヶ月未満児は次の発達過程の段階に移行しており、評価の対象となる子どもはいなかった。また6か月から1歳3か月未満児についても、2つのモデル園で同様の以降が見られた。

1-1-1. 3歳未満児のねらいの達成度

表3に示す通り、6か月から1歳3か月未満児については、モデル園全体として「②お腹がすいたら、泣く、または、喃語によって、乳や食べものを催促する」と、「④ゆったりとした雰囲気の中で、食べさせてくれる人に関心を持つ」の達成率は85.7%であった。次いで、「①よく遊び、よく眠り、満足するまで乳を吸う」が71.4%であり、この3点のねらいについては、概ね達成が図られたといえよう。ただ、「③いろいろな食べものに関心を持ち、自分で進んで食べものを持って食べようとする」は57.1%であり、半数近い子どもに著しい向上が見られなかった。食欲や保育者との関係等については向上が図られたが、食べものの幅を広げたり、自分の力で食べようとする姿勢に関しては、個人差も大きかったということだろう。6か月から1歳3か月未満児に対する食育において、「ねらい③」はより丁寧な援助が求められる課題であるともいえる。

なお、園別にみると、「ねらい③」については共通に困難さを見せてはいるものの、「ねらい①」「ねらい②」と「ねらい④」の間で達成率が逆転している。保育者が援助する際の重点事項、また子どもの評価に対する判断基準に相違が見られるということだろう。

次に、1歳3か月から2歳未満児については、「②いろいろな食べものに関心を持ち、手づかみ、または、スプーン、フォークなどを使って自分から意欲的に食べようとする」の81.2%を筆頭に、次いで「①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ」と④楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人に関心を持つ」が78.3%、「③食事の前後や汚れたときは、顔や手を拭き、きれいになった快さを感じる」が75.4%となっている。4つのねらいとも、概ね達成が図られたとあって良いだろう。特に、6か月から1歳3か月未満児において課題として残されていた食べものの幅を広げたり、自分の力で食べようとする

姿勢の発達を見る「ねらい②」が、この時期になって最も達成率が高くなっているということは、モデル園の実践上の努力を伺わせるものである。また、6か月から1歳3か月未満児と1歳3か月から2歳未満児を対象とする保育は、0歳児クラスと1歳児クラスの違いにもつながる。その意味で、食べものの幅を広げたり、自分の力で食べようとする姿勢を促す食育は、1歳児クラスになって、より本格化する傾向が強いのといえよう。

なお、園別にみると、全体的にねらいの達成率が高い園とそうでない園が見られる。園により、食育実践の充実度が異なるとも見なせるが、各園とも4つのねらい間に達成率の差は少ない。その意味で、食育実践の充実度に差があったと見なすよりも、子どもの発達を捉える上で、「向上が著しいと思われるもの」の判断基準がやや厳しい保育者とやや甘い保育者があったと見なす方が妥当であろう。

次に、2歳児については、「①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ」の55.3%を筆頭に、「②食べものに関心を持ち、自分で進んでスプーン、フォーク、箸などを使って食べようとする」が54.3%、「⑥保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進めることの喜びを味わう」が52.1%と続く。この3つのねらいまでが半数を超える達成率を示しており、他は決して十分とはいえない達成率となっている。

達成率が半数を超えた「ねらい①」及び「ねらい②」「ねらい⑥」は、2歳児としての新たな課題性も含みながらも、それ以前の発達過程区分から引き続きの課題として捉えうるものである。その分、達成率も比較的高い割合を示していると考えられる。一方で、2歳児になり、それ以前の段階よりも細分化されたねらいの中には、「③いろいろな食べものを進んで食べる」などのように、食べものの嗜好がはっきりしてくる分、1歳3か月から2歳未満児の時点よりも、達成率が下がっているものも見られる。また、「⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、調理をする人に関心を持つ」や「⑧食生活に必要な基本的な習慣や態度に関心を持つ」のように、新たに加わったねらいについては、この時期では著しい向上を実感するまでは至らなかったということ

だろう。

なお、園別に見ると、ねらい毎の達成率に差が見られる。

具体的には、上矢部は「④保育士の手助けによって、うがい、手洗いなど、身の回りを清潔にし、食生活に必要な活動を自分でする」と「⑤身近な動植物をはじめ、自然事象をよく見たり、触れたりする」が比較的高い。

文京は、達成率が50%を超えるものは「①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ」のみであり、「⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、調理をする人に関心を持つ」に至っては、ほとんど向上が実感されていない。

上作延は「①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ」と「②食べものに関心を持ち、自分で進んでスプーン、フォーク、箸などを使って食べようとする」「⑤身近な動植物をはじめ、自然事象をよく見たり、触れたりする」がほぼ当該園児全てに実感できている分、「④保育士の手助けによって、うがい、手洗いなど、身の回りを清潔にし、食生活に必要な活動を自分でする」と「⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、調理をする人に関心を持つ」が未達成であることとの開きが目立つ。

戸手は、達成率が50%を超えるものは「⑨保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進め、一緒に食べる楽しさを味わう」のみであり、「①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ」や「⑤身近な動植物をはじめ、自然事象をよく見たり、触れたりする」「⑧食生活に必要な基本的な習慣や態度に関心を持つ」は、あまり向上が実感されていない。

一般に、成長・発達の変化が著しい0歳児や1歳児の保育は、園あるいはクラス独自の援助内容を示すというよりも、子ども自体の発達の変化に応じた援助が優先される。その意味で、0歳児及び1歳児の保育は、園あるいはクラス単位で独特の経験内容が設定され、援助が図られることは少ない。しかし、2歳児以降になると、子どもの成長・発達の足並みも揃い始め、クラスとしての保育を進めることも可能になる。そのため、園あるいはクラスの保育者の考え方が顕著に表れ始める。この傾向は食育実践においても変わりはない。「⑤身近な動植物をはじめ、自然事象をよく見たり、触れたりする」や「⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、

調理をする人に関心を持つ」といったねらいは、この時期に経験させたい食育内容として、自然とのふりあいや調理員などとの出会いを重視するか否かという価値観の問題に深くかかわるものである。

ただ、児童票に示されたねらいは、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』において設定され、各園の食育実践として期待されているものである。園あるいは保育者の独自の価値観は尊重しつつも、それが現在、広く期待されている食育に照らして妥当であるか否かも検証されなければならない。子どもを評価する機会となる児童票の記載は、こうした保育する側の反省にもつなげるべきものであろう。各モデル園別のねらいの達成率の差は、こうした視点の重要性も気づかせてくれる。

1-1-2. 3歳以上児のねらいの達成度

表4に示す通り、3歳以上児については、モデル園全体として「食と健康①できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう」の中で、食べさせてくれる人に関心を持つ」が69.1%と達成率が最も高く、次いで、「食と人間関係①自分で食事ができること、身近な人と一緒に食べる楽しさを味わう」が68.3%、となり、この2点のねらいのみが半数を超える達成率を示した。

一方、「料理と食②食事の準備から後片付けまでの食事づくりに自らかかわり、味や盛りつけなどを考えたり、それを生活に取り入れようとする」の10.3%を始め、「食と文化②地域で培われた食文化を体験し、郷土への関心を持つ」の10.6%、「食と健康②自分の体に必要な食品の種類や働きに気づき、栄養バランスを考慮した食事をとろうとする」と「食と文化①いろいろな料理に出会い、発見を楽しんだり、考えたりし、様々な文化に気づく」の14.9%、「いのちの育ちと食①自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう」の16.3%、「料理と食③食事にふさわしい環境を考えて、ゆとりある落ち着いた雰囲気でする」の26.9%「いのちの育ちと食②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切に持つ」の27.1%、「いのちの育ち食③身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係

を考え、食材に対する感覚を豊かにする」の29.7%が30%に満たず、低い達成率となった。

前述した通り、『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針』では、3歳以上児から食育内容が5項目に細分化したかたちで設定されている。このうち、食を通じて、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う項目である「食と健康」と、食を通じて、他の人々と親しみ支え合うために、自立心を育て、人とかかわる力を養う項目である「食と人間関係」は、2歳児の食育内容の延長線上で考えられる項目である。

しかし、食を通じて、人々が築き、継承してきた様々な文化を理解し、つくり出す力を養う項目である「食と文化」と、食を通じて、自らも含めたすべてのいのちを大切にできる力を養う項目である「いのちの育ちと食」、食を通じて、素材に目を向け、素材に関わり、素材を調理することに興味を持つ力を養う項目である「料理と食」は、3歳以上児になって、新たな課題に加わったものである。

達成率が高かったねらいが「食と健康」と「食と人間関係」の項目であることは、2歳児から引き継がれていた課題であったからであろう。一方、達成率が低かったねらいが「食と文化」「いのちの育ちと食」「料理と食」に多く見られるのは、これらの項目が3歳以上児となり、新たな課題として加わったものだからであろう。

ただ、園別にみると、達成率にバラつきも見られる。例えば、全体で最も達成率が高かった「食と健康①」に関して、上矢部は95.3%、上作延は85.9%とほぼ当該園児全員に著しい向上が見られたとしているが、戸手は48.9%、文京は45.0%と、50%にも達していない。一方、「いのちの育ちと食②」は全体で27.1%の達成率に過ぎなかったが、上作延は51.1%、上矢部は50.0%となっていた。また、「食と文化①」は、全体で14.9%の達成率だったが、上作延は32.6%であるのに対し、上矢部は19.8%、文京は6.3%、戸手に至っては0%であった。さらに、戸手の場合は、著しい向上が見られない項目が6項目も見られた。

こうした園別のバラつきは、2歳児にも見られたように保育者が援助する際の重点事項、また子どもの評価に対する判断基準が、園によって異なっていることに起因すると思われる。

例えば、「食と文化②」は地域の食文化との

出会いを通して、郷土への関心を持つことを期待するねらいだが、こうした取り組みは食育の導入により意識され始めた取り組みであり、その成果が現れまでにはまだ時間がかかる。特に、4つのモデル園はいずれも都市部に位置しており、継承すべき特色ある郷土料理などの食文化は極めて少ない。こうした地域にあって、「食と文化②」をどう捉え、実践をしていくかという問題は、容易に方向性が見つかるものではない。また、「食と健康②」は栄養バランスを考慮した食事を子ども自身が気づいて、摂ろうとすることを期待するねらいだが、「栄養バランスの考慮」をどの程度のレベルに設定するかにより、子どもの評価も異なってくる。大人が理解するレベルまで期待していないことはわかっていても、3歳以上児が理解できる栄養バランスとは何かについて、保育者間で共通理解が図られているわけではない。こうした問題も、園別にねらいの達成度の差が見られる要因となっている。

ちなみに、表5に3歳以上児を対象に、全15のねらいについて、個々の子どもに著しい向上が見られた数を示した。そして、著しい向上が見られたポイントを5点刻みで分け、11点から15点を「A. 高位」、5点から10点を「B. 中位」、0点から5点を「C. 低位」に大別した。これを見ると、モデル園全体では、A段階が9.4%、B段階が34.3%、C段階が56.3%であった。ただ、園別に見ると、上矢部はB段階が65.1%と最も比率が高かった。これに対して、文京と戸手はC段階の比率が極めて高く、それぞれ文京83.8%、戸手89.1%であった。一方、上作延は、B段階45.75%、C段階38.0%とほぼ拮抗する状態で評価していた。

しかし、実践の報告を見聞きする限り、4つのモデル園にこれほどの差は感じない。とすれば、園別の食育のねらいの達成度の差は、子どもの評価に対する判断基準が、園あるいは保育者によって異なっていたためと理解することが自然であろう。例えば、戸手の保育者の中には「ねらいがかなり高く、〇が少なかった」との感想も見られる。ねらいの要求度を高く捉えれば、子どもの評価も自ずと厳しくなる。おそらく、文京と戸手などは、やや厳しく判断した結果と思われる。

表3 平成19年度末間近の園単位のねらいの達成度（3歳未満児）

| ね ら い | | 全体 | 上矢部 | 文京 | 上作延 | 戸手 |
|-------------|---|-------|--------|-------|--------|-------|
| | | % | % | % | % | % |
| 6か月未満児 | ①よく遊び、よく眠る。 | — | — | — | — | — |
| | ②お腹がすいたら、泣く。 | — | — | — | — | — |
| | ③保育士にゆったり抱かれて、乳（母乳・ミルク）を飲む。 | — | — | — | — | — |
| | ④授乳してくれる人に関心を持つ。 | — | — | — | — | — |
| 6か月～1歳未満児 | ①よく遊び、よく眠り、満足するまで乳を吸う。 | 71.4% | 50.0% | — | 100.0% | — |
| | ②お腹がすいたら、泣く。または、喃語によって、乳や食べものを催促する。 | 85.7% | 75.0% | — | 100.0% | — |
| | ③いろいろな食べものに関心を持ち、自分で進んで食べものを持って食べようとする。 | 57.1% | 50.0% | — | 66.7% | — |
| | ④ゆったりとした雰囲気の中で、食べさせてくれる人に関心を持つ。 | 85.7% | 100.0% | — | 66.7% | — |
| 1歳3か月～2歳未満児 | ①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ。 | 78.3% | 65.5% | 88.9% | 90.0% | 83.3% |
| | ②いろいろな食べものに関心を持ち、手づかみ、または、スプーン、フォークなどを使って自分から意欲的に食べようとする。 | 81.2% | 72.4% | 88.9% | 90.0% | 83.3% |
| | ③食事の前後や汚れたときは、顔や手を拭き、きれいになった快さを感じる。 | 75.4% | 58.6% | 83.3% | 100.0% | 83.3% |
| | ④楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人に関心を持つ。 | 78.3% | 65.5% | 77.8% | 100.0% | 91.7% |
| 2歳児 | ①よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ。 | 55.3% | 37.5% | 57.5% | 95.0% | 22.2% |
| | ②食べものに関心を持ち、自分で進んでスプーン、フォーク、箸などを使って食べようとする。 | 54.3% | 31.3% | 47.5% | 95.0% | 44.4% |
| | ③いろいろな食べものを進んで食べる。 | 44.7% | 25.0% | 47.5% | 65.0% | 33.3% |
| | ④保育士の手助けによって、うがい、手洗いなど、身の回りを清潔にし、食生活に必要な活動を自分でする。 | 35.1% | 62.5% | 32.5% | 20.0% | 33.3% |
| | ⑤身近な動植物をはじめ、自然現象をよく見たり、触れたりする。 | 46.8% | 62.5% | 27.5% | 95.0% | 22.2% |
| | ⑥保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進めることの喜びを味わう。 | 52.1% | 56.3% | 42.5% | 75.0% | 44.4% |
| | ⑦楽しい雰囲気の中で、一緒に食べる人、調理をする人に関心を持つ。 | 19.1% | 31.3% | 7.5% | 20.0% | 33.3% |
| | ⑧食生活に必要な基本的な習慣や態度に関心を持つ。 | 22.3% | 12.5% | 20.0% | 40.0% | 16.7% |
| | ⑨保育士を仲立ちとして、友達とともに食事を進め、一緒に食べる楽しさを味わう。 | 43.6% | 18.8% | 30.0% | 80.0% | 55.6% |

表4 平成19年度末間近の園単位のねらいの達成度（3歳以上児）

| ね ら い | | 全体 | 上矢部 | 文京 | 上作延 | 戸手 |
|----------|--|-------|-------|-------|-------|-------|
| | | % | % | % | % | % |
| 食と健康 | ①できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう。 | 69.1% | 95.3% | 45.0% | 85.9% | 48.9% |
| | ②自分の体に必要な食品の種類や働きに気づき、栄養バランスを考慮した食事をとろうとする。 | 14.9% | 18.6% | 11.3% | 27.2% | 2.2% |
| | ③健康、安全など食生活に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 | 42.6% | 94.2% | 13.8% | 47.8% | 14.1% |
| 食と人間関係 | ①自分で食事ができること、身近な人と一緒に食べる楽しさを味わう。 | 68.3% | 95.3% | 33.8% | 95.7% | 45.7% |
| | ②様々な人々との会食を通して、愛憎や信頼感を持つ。 | 42.6% | 64.0% | 16.3% | 75.0% | 13.0% |
| | ③食事に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 | 48.0% | 89.5% | 18.8% | 58.7% | 23.9% |
| 食と文化 | ①いろいろな料理に出会い、発見を楽しんだり、考えたりし、様々な文化に気づく。 | 14.9% | 19.8% | 6.3% | 32.6% | 0.0% |
| | ②地域で培われた食文化を体験し、郷土への関心を持つ。 | 10.6% | 0.0% | 31.3% | 13.0% | 0.0% |
| | ③食習慣、マナーを身につける。 | 44.9% | 81.4% | 15.0% | 58.7% | 22.8% |
| いのちの育ちと食 | ①自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう。 | 16.3% | 10.5% | 10.0% | 43.5% | 0.0% |
| | ②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にすることを大切にする。 | 27.1% | 50.0% | 6.3% | 51.1% | 0.0% |
| | ③身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係を考え、食材に対する感覚を豊かにする。 | 29.7% | 43.0% | 33.8% | 43.5% | 0.0% |
| 料理と食 | ①身近な食材を使って、調理を楽しむ。 | 48.3% | 96.5% | 45.0% | 39.1% | 15.2% |
| | ②食事の準備から後片付けまでの食事づくりに自らかかわり、味や盛りつけなどを考えたり、それを生活に取り入れようとする。 | 10.3% | 18.6% | 1.3% | 20.7% | 0.0% |
| | ③食事にふさわしい環境を考えて、ゆとりある落ち着いた雰囲気の中で食事をすすめる。 | 26.9% | 30.2% | 8.8% | 46.7% | 19.6% |

表5 平成19年度末の個人別のねらいの達成度(3歳以上児)

| ポイント | 合計 | | 上矢部 | | 文京 | | 上作延 | | 戸手 | | |
|--------------|-----|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | |
| A. 高位(11~15) | 33 | 9.4% | 17 | 19.8% | 1 | 1.3% | 15 | 16.3% | 0 | 0.0% | |
| B. 中位(5~10) | 120 | 34.3% | 56 | 65.1% | 12 | 15.0% | 42 | 45.7% | 10 | 10.9% | |
| C. 低位(0~5) | 197 | 56.3% | 13 | 15.1% | 67 | 83.8% | 35 | 38.0% | 82 | 89.1% | |
| 計 | 350 | 100.0% | 86 | 100.0% | 80 | 100.0% | 92 | 100.0% | 92 | 100.0% | |
| A | 15 | 2 | 0.6% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 2 | 2.2% | 0 | 0.0% |
| | 14 | 3 | 0.9% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% | 3 | 3.3% | 0 | 0.0% |
| | 13 | 11 | 3.1% | 6 | 7.0% | 0 | 0.0% | 5 | 5.4% | 0 | 0.0% |
| | 12 | 6 | 1.7% | 5 | 5.8% | 1 | 1.3% | 0 | 0.0% | 0 | 0.0% |
| | 11 | 11 | 3.1% | 6 | 7.0% | 0 | 0.0% | 5 | 5.4% | 0 | 0.0% |
| B | 10 | 14 | 4.0% | 11 | 12.8% | 0 | 0.0% | 3 | 3.3% | 0 | 0.0% |
| | 9 | 29 | 8.3% | 15 | 17.4% | 2 | 2.5% | 12 | 13.0% | 0 | 0.0% |
| | 8 | 21 | 6.0% | 9 | 10.5% | 4 | 5.0% | 7 | 7.6% | 1 | 1.1% |
| | 7 | 18 | 5.1% | 1 | 1.2% | 0 | 0.0% | 16 | 17.4% | 1 | 1.1% |
| | 6 | 38 | 10.9% | 20 | 23.3% | 6 | 7.5% | 4 | 4.3% | 8 | 8.7% |
| C | 5 | 36 | 10.3% | 5 | 5.8% | 1 | 1.3% | 22 | 23.9% | 8 | 8.7% |
| | 4 | 25 | 7.1% | 3 | 3.5% | 8 | 10.0% | 9 | 9.8% | 5 | 5.4% |
| | 3 | 27 | 7.7% | 3 | 3.5% | 12 | 15.0% | 4 | 4.3% | 8 | 8.7% |
| | 2 | 35 | 10.0% | 0 | 0.0% | 26 | 32.5% | 0 | 0.0% | 9 | 9.8% |
| | 1 | 38 | 10.9% | 0 | 0.0% | 14 | 17.5% | 0 | 0.0% | 24 | 26.1% |
| | 0 | 36 | 10.3% | 2 | 2.3% | 6 | 7.5% | 0 | 0.0% | 28 | 30.4% |
| 計 | 350 | 100.0% | 86 | 100.0% | 80 | 100.0% | 92 | 100.0% | 92 | 100.0% | |

表6 平成19年度内のねらいの達成度の変化(3歳以上児)

| ねらい | 全体 | | 上矢部 | | 文京 | | 上作延 | | 戸手 | | |
|----------|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 年度当初 | 年度末間近 | 年度当初 | 年度末間近 | 年度当初 | 年度末間近 | 年度当初 | 年度末間近 | 年度当初 | 年度末間近 | |
| | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | |
| 食と健康 | ①できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう。 | 45.6% | 69.1% | 14.1% | 95.3% | 29.3% | 45.0% | 88.9% | 85.9% | 49.3% | 48.9% |
| | ②自分の体に必要な食品の種類や働きに気づき、栄養バランスを考慮した食事をとろうとする。 | 9.8% | 14.9% | 0.0% | 18.6% | 0.0% | 11.3% | 38.3% | 27.2% | 0.0% | 2.2% |
| | ③健康、安全など食生活に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 | 16.5% | 42.6% | 1.3% | 94.2% | 11.0% | 13.8% | 38.3% | 47.8% | 14.7% | 14.1% |
| 食と人間関係 | ①自分で食事ができること、身近な人と一緒に食べる楽しさを味わう。 | 44.9% | 68.3% | 6.4% | 95.3% | 28.0% | 33.8% | 95.1% | 95.7% | 49.3% | 45.7% |
| | ②様々な人々との会食を通して、愛情や信頼感を持つ。 | 25.9% | 42.6% | 1.3% | 64.0% | 19.5% | 16.3% | 74.1% | 75.0% | 6.7% | 13.0% |
| | ③食事に必要な基本的な習慣や態度を身につける。 | 24.4% | 48.0% | 5.1% | 89.5% | 11.0% | 18.8% | 50.6% | 58.7% | 30.7% | 23.9% |
| 食と文化 | ①いろいろな料理に出会い、発見を楽しんだり、考えたりし、様々な文化に気づく。 | 8.5% | 14.9% | 1.3% | 19.8% | 0.0% | 6.3% | 32.1% | 32.6% | 0.0% | 0.0% |
| | ②地域で培われた食文化を体験し、郷土への関心を持つ。 | 6.6% | 10.6% | 0.0% | 0.0% | 20.7% | 31.3% | 4.9% | 13.0% | 0.0% | 0.0% |
| | ③食習慣、マナーを身につける。 | 16.8% | 44.9% | 2.6% | 81.4% | 7.3% | 15.0% | 32.1% | 58.7% | 25.3% | 22.8% |
| いのちの育ちと食 | ①自然の恵みと働くことの大切さを知り、感謝の気持ちを持って食事を味わう。 | 10.1% | 16.3% | 0.0% | 10.5% | 4.9% | 10.0% | 23.5% | 43.5% | 12.0% | 0.0% |
| | ②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみをもち、すべてのいのちを大切にすることを大切にする。 | 12.3% | 27.1% | 16.7% | 50.0% | 1.2% | 6.3% | 30.9% | 51.1% | 0.0% | 0.0% |
| | ③身近な自然にかかわり、世話をしたりする中で、料理との関係を考え、食材に対する感覚を豊かにする。 | 21.2% | 29.7% | 41.0% | 43.0% | 2.4% | 33.8% | 40.7% | 43.5% | 0.0% | 0.0% |
| 料理と食 | ①身近な食材を使って、調理を楽しむ。 | 8.9% | 48.3% | 1.3% | 96.5% | 17.1% | 45.0% | 13.6% | 39.1% | 2.7% | 15.2% |
| | ②食事の準備から後片付けまでの食事づくりに自らかわり、味や盛りつけなどを考えたり、それを生活に取り入れようとする。 | 6.3% | 10.3% | 3.8% | 18.6% | 0.0% | 1.3% | 21.0% | 20.7% | 0.0% | 0.0% |
| | ③食事にふさわしい環境を考えて、ゆとりある落ち着いた雰囲気の中で食事をとする。 | 17.7% | 26.9% | 0.0% | 30.2% | 7.3% | 8.8% | 38.3% | 46.7% | 25.3% | 19.6% |

2. 平成 19 年度内における子どもの成長

3 歳以上児を対象に、モデル園としての取り組みの最終年度である平成 19 年度内における子どものねらいの達成度の変化は、表 6 に示す通りである。

これを見ると、モデル園全体を平均すると、15 のねらい全てにわたり、達成率が向上していることがわかる。

このうち、達成率が最も向上したのは、39.4% の伸び率を示した「料理と食①身近な食材を使って、調理を楽しむ」であった。次いで、「食と文化③食習慣、マナーを身につける」が 28.1%、「食と健康①できるだけ多くの種類の食べものや料理を味わう」の中で、食べさせてくれる人に関心を持つ」と「食と人間関係③食事に必要な基本的な習慣や態度を身につける」が 23.6%、「食と人間関係①自分で食事ができること、身近な人と一緒に食べる楽しさを味わう」23.3%の伸び率で続く。以上が、20%以上の伸び率を示したものである。

調理保育は、0157 問題以来、敬遠されがちな取り組みであったが、モデル園となり、「食べる」ことと「つくる」ことのつながりを大切にしたいと考え、他園に先駆けて取り組んできた成果が現れた結果であろう。また、食事の習慣やマナーの向上、他者と一緒に食べる楽しさや食べものの幅の広がりも、モデル園として、食事時間中の指導・援助の充実ぶりを示すものであろう。

一方、年度末間近の時点で達成率が低かったねらいも、年度当初から若干ではあるが向上が見られることがわかる。例えば、年度末間近の時点で最も達成率が低かった「料理と食②食事の準備から後片付けまでの食事づくりに自らかかわり、味や盛りつけなどを考えたり、それを生活に取り入れようとする」も 4.0%の伸び率を示している。また、27.1%の達成率であった「いのち育ちと食②栽培、飼育、食事などを通して、身近な存在に親しみを持ち、すべてのいのちを大切にすることを大切にする心を持つ」も伸び率は 14.8%であった。

このように、年度末間近の時点で達成率は低かったねらいも、年度内の援助・指導により、若干の向上は見られている。前述した通り、こうした達成率の低いねらいは、3 歳以上児となり、新たな課題として加わったものだが、各モ

デル園なりに、「食と文化」「いのちの育ちと食」「料理と食」といった項目を自覚する中、継続的な働きかけをしてきたことはわかる。

次に、園別に子どものねらいの達成度の変化を棒グラフにし、それぞれ図 1 に上矢部、図 2 に文京、図 3 に上作延、図 4 に戸手を示す。

これを見ると、上矢部は、「料理と食①」の 95.2%の伸び率を始め、「食と健康①」「食と健康③」「食と人間関係①」「食と人間関係③」が 80.0%以上の伸び率を示した。それに対して、「食と文化②」の 0%を始め、「食と健康②」「食と文化①」「いのちの育ちと食①」「いのちの育ち①」「いのちの育ちと食③」「料理と食②」は 20%以下の伸び率にとどまっている。子どもの成長について、メリハリのある評価がなされたといえよう。こうしたメリハリのある評価は、食育実践上の成果と課題も鮮明にする。

一方、文京、上作延、戸手には、評価を下げたねらいも見られる。文京は、「食と人間関係②」の -3.3%の 1 点のみだが、上作延は、「食と健康①」「食と健康②」「利用理と食②」の 3 点。戸手は、「食と健康①」「食と健康③」「食と人間関係①」「食と人間関係③」「食と文化③」「いのちの育ちと食①」「料理と食③」の 7 点見られた。特に、戸手の「いのちの育ちと食①」は -12.0%、上作延の「食と健康②」 -11.1%と、10%以上、評価を下げている。

前述した通り、子どもの評価に対する判断基準は、園あるいは保育者によって異なっている。また、今回の調査では、年度当初と年度末間近の評価を記入する時期の間隔があまりなく、戸手の保育者の中からは、「幼児では、変化があまり見られず、記入に変化をあらわせなかった」との感想もよせられた。よって、数字上、評価を下げたねらいを、そのまま受け取ることは乱暴であろう。

ただ、評価の基準が異なるにしても、年度内において、同一の保育者が行う評価そのものにずれが見られることは歓迎すべきことではない。もし、評価を下げたねらいが、一人の保育者の判断基準のぶれを示しているとするれば、今後、是正すべき課題となろう。また、一人の保育者としての判断基準にぶれがないとするれば、評価を下げたねらいがあるということは、年度内に子どもの成長に後退が見られたということになる。こうした場合は、食育プログラム、及

び食育実践そのものの妥当性を問い直す必要もあろう。

